

H25年度 上越教育大学実践研究発表会  
ポスター発表申し込み (申し込み順)

2013/11/11現在

	名前	所属	学外	テーマ	発表要旨	備考
1	齋藤一雄	上越教育大学		埼玉県特別支援教育教育課程編成要領の変遷	教育課程編成の基準として学習指導要領があるが、その一方で、地方や学校の特色に応じた教育課程編成も求められている。埼玉県では、埼玉県教育課程編成要領が学習指導要領の改訂を受けて編集されている。そのなかで、知的障害教育課程編成を中心にどのような変遷をたどったのかを概観することにした。その結果、埼玉県特別支援教育教育課程編成要領は埼玉県の特別支援教育の歴史と学習指導要領との整合性を図りながら、埼玉県の方針を示していることがわかった。また、作成協力委員によって、県内の具体的な実践の収集が行われ、モデルとなる指導計画や日課表の例示、学習内容表の作成、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成など、特別支援学校・学級の担任等にとって役立つ情報が多いことがわかった。	
2	齋藤一雄	上越教育大学		埼玉県特別支援教育研究会の発足から現在までの変遷	埼玉県特別支援教育研究会の発足から現在までの変遷を概観し、教育委員会との関係や小・中学校や養護学校等での実践研究活動の推進に果たしてきた役割について検討する。埼玉県特殊教育研究会は1950年に設立され、60周年を迎えている。養護学校義務制以前の特殊学級が中心だった頃は、県教育委員会との連携も強かった。また、研究会の周年ごとに記念誌を発行し、研究会に関係する資料や研究協議会、研究発表会、各研究部の活動報告などの実践研究に関する資料などが掲載されている。研究協議会は52回、研究発表会も42回を数え、難聴・言語障害研究部、発達障害・情緒障害研究部、特別支援学校研究部ごとの活動も活発である。研究協議会では、18の分科会において各2ずつの実践発表がなされている。	
3	檜垣栄慈	愛知県立千種聾学校	学外	聾学校低学年児童を対象とした報告内容の明確化を促すための支援一対話場面における視覚的フィードバックが報告内容の明確化に及ぼす効果について	本研究は、聾学校小学部3年生5名(男児3名、女児2名)を対象として、出来事に関わる報告内容の明確化を促すための視覚的教材(絵カード)を活用した支援効果について検討することを目的とした。説明課題において、聞き手が話し手の報告内容に即して絵カードを操作することで、話し手は聞き手が内容をどの程度理解しているかという情報を視覚的に入手できると考えた。絵カード操作の有無による報告内容を比較した結果、再現場面を導入することで、報告内容において「動作主」と「行為」の明確化を促す傾向が認められた。以上より、指導者が絵カードを操作する場面を設定することで、児童が自己の報告内容と聞き手の理解内容との間の不一致に気がつき、その結果、報告内容の明確化が促されたと考	前半の発表とする
4	中嶋 忍		学外	特別支援教育実践における障害児教育史研究の役割	障害児教育史は、障害児教育に関する歴史的事象を取り上げて説明するものである。現在の障害のある子どもへの教育は、従来の障害の種類と程度に応じて特別な場で行う「特殊教育」から、学習障害や注意欠陥多動性障害等を含めて一人一人のニーズに応じてあらゆる場において必要な支援を行う「特別支援教育」へと転換された。そして医学の進歩により障害は、以前不明であった点が説明可能となってきている。この障害の解明に伴い、教育方法についても、障害特性に合った新しい指導法が考え出されている。しかし、単なる歴史的事象を扱うのみと考えられやすい障害児教育史は、「歴史を現在の実践活動にどのように役立てていくのか」という問題にぶつかる。そこで障害児教育史は、実践活動で起きている諸問題を解決できるようなものでなければならないと考える。そのために本研究では、特別支援教育における障害児教育史研究のあり方を探るために、研究役割及び研究方法について考察した。	

5	石野 公子	妙高市立 新井小学 校	学外	小学校低学年 における特別 な支援を要す る児童への手 立てー放課後 スキルアップ の取り組みを 中心にー	本校では、平成23年度から低学年を対象にした放課後スキルアップを実施している。参加を希望する児童の保護者からアンケートをとり、本人ならびに保護者のニーズ、悩みを書いてもらい、担任所見も参考にして活動内容と目標、手立てを設定した。当初は、小集団のSSTを想定していたが、例年、参加者が20名以上（今年度は34名）になるため、集団ゲームの中で様々なスキルを獲得することとした。1年目の反省から、活動をパターン化し見通しを持たせることで、逸脱する児童が減った。また、3つのグループを作って2年生をチームリーダーにし整列や号令、司会などの役割を与えることで、参加意識を高めた。ゲームそのものは1学期間同じものにし、活動の一部や目標設定を少しずつ高くすることで、子ども同士が助け合う集団随伴性が見られた。これらの活動は、全校で取り組む異年齢集団活動にも生かされ、仲間づくりとして有効であった。
6	樋熊一夫・芦 口玲子・石田 脩介・井上和 紀・越井絵 美・山下雄 己・植村祥 子・加茂勇・ 小林里美・中 村潤一郎・大 庭重治・八島 猛	上越教育 大学大学院・上越 教育大学		漢字学習に困 難を示す生徒 のための自己 学習支援シス テムの開発	読み書き障害は学習障害の約8割を占めており、通常の学級においてもその支援ニーズが高まっている。そのような読み書きに困難を示す子どもは、それまでの学習において失敗経験を重ねている場合が多く、学習に対して強い苦手意識を持っている。本研究では、漢字の想起に困難を示す中学生を対象として、iPadとデータベース・アプリケーション、その他情報通信技術を活用することにより、自ら学ぶことの楽しさを味わうことができるような自己学習支援システムを開発した。特に、大学のセンターにおける支援者との関わりとともに、普段の家庭学習をも視野に入れたシステムの開発をめざした。
7	荒川隆之・安 藤裕子・太田 有紀・堂前智 範・北條龍 司・坂本のぞ み・川西沙 季・村中智彦	上越教育 大学大学院・上越 教育大学		知的障害教育 臨床実習の取 組みと成果 (2)	特別支援教育コースが開講している大学院生対象の授業科目として、特別支援教育実践研究センターで、「知的障害教育臨床実習」が実施されている。臨床実習の目標は、参加児の発達や学習を促すとともに、受講学生の指導者としての診断的評価（実態把握）や個別の指導計画の作成、指導、評価に関わる基礎的な指導技術や実質的指導力の習得を目標としている。本発表では、その取り組みや成果の一部を紹介する。
8	吉村俊介	大田原市 立紫塚小 学校	学外	小学校特別支 援学級間にお ける『学び合 い』実践ー異 年齢集団にお ける人間関係 の変容につい てー	平成23年10月から、大田原市立大田原小学校特別支援学級では異年齢集団における『学び合い』を実践してきた。『学び合い』とは、教師が教えたいことを教えたいように教えるのではなく、授業中に子ども同士がお互いに教え合って、教師の設定した課題を達成していくという方法である。本報告では、平成23年10月から平成25年3月までの実践内容や子ども達の人間関係の変容について紹介する。また、『学び合い』実践を通して感じた成果と課題について述べたい。
9	松田純子・川 崎優美子・河 野仁・高橋雅 子・北條香 織・金子直 美・永井翔 子・丸山真 幸・佐藤愛・ 松本侑希子・ 藤井和子	上越市立 大潟町小 学校・上 越教育大 学大学院	学外	言語障害通級 担当教師によ る吃音児指導 プログラムの 協働開発に関 する研究(1)	本研究は、言語通級担当教師(以下、担当教師)が協働で開発、実施した吃音児童の指導プログラムにおける担当教師の振り返りの内容を分析することで協働開発の成果と課題について明らかにすることを目的とした。プログラム実施後、担当教師15名にアンケート調査①を行った結果、プログラムの運営に関わる振り返りが見られたものの、個々の教師の指導や授業改善に関する振り返りは把握することができなかった。そこで改めて担当教師4名に対して、授業の振り返りに関するアンケート調査②を行ったところ、指導形態の工夫や通常学級担任への働き掛けなど授業改善への記述が見られた。2つの調査から、事前に目的を確認し合い共有しておくことで、目的に沿った振り返りが行われ、授業改善につながるということが推測された。これらのことから、プログラムの協働開発を行う際には、目的の明確化と共有をいかに図るかが重要であることが示唆された。

10	寺島ひかり	妙高市立 新井小学 校	学外	学習意欲の継続に困難さを示す児童に対する注意喚起の工夫（小学校特別支援学級低学年での実践から）	小学校低学年の児童にとって、授業時間を通して学習意欲を持続することは難しく、特別支援学級においてはその傾向が強くなると考える。本実践を行った学級においても、授業開始時にあった意欲が、活動の展開に伴って低下してしまったり、開始時から意欲がなかったりすることが児童のつぶやきや姿勢、行動から認められた。このため、段階を踏んで学習内容を深めたり広げたりすることが難しいという課題があった。そこで、導入段階だけではなく、活動に合わせて児童の注意を喚起することに重点を置いて授業を行うこととした。具体的な方策としては①動作化によって刺激を与える②補助や代用によって苦手意識を軽減する③実生活との関連によって学ぶ必要感を強調する④絵や写真、映像によって複数の感覚を働かせることを試みた。その結果、自ら意欲的に学習しようとする姿が徐々に見られるようになったり、自分に合った学習方法を見つけ出し、授業中に取り入れたいと意思表示をしたりするようになった。	
----	-------	-------------------	----	---	--	--